



アーカイブ 通信 No.17

No.17

2019.11.1

- ◆編集・発行：
ネットワーク・市民アーカイブ
- ◆tel: 042-540-1663 (事務局)
tel・fax: 042-536-5535 (市民アーカイブ多摩)
E-mail: simin-siryu@nifty.com
www.c-archive.jp
〒190-0022 立川市錦町 3-1-28-301 (事務局)
- ◆正会員 1口 6,000 円、賛助会員 1口 3,000 円 / 年
ゆうちょ銀行 振替口座 00120-9-729226
口座名：市民アーカイブ

◆社会労働専門図書館
エル・ライブラリーは、
Museum・Library・Archives
の資料を所蔵するMLA融合
型図書館として、ユニークな
社会労働専門図書館である。
大阪100年の社会労働運動
史の一次資料を所蔵すると同
時に、最新の図書・雑誌・視
聴覚資料を収集している。
大阪府から受託運営してい
た府の労働図書館を2008
年に廃止され、同時に当法人
資料室への補助金を全廃され
て壊滅的危機に陥ったとき、
ここにしかない貴重な資料
を守ろうと、役職員が身銭を

(公財)大阪社会運動協会
エル・ライブラリー (大阪産業労働資料館)

働く人々の今を支え 歴史を未来に伝える

谷合佳代子 (館長)



とはいえ、利用実績は確実
に増えていく。MLAの資料
を誰が使っているのかを簡条
書きしよう。
M (博物資料) .. 数年に1回程
度開く展覧会で展示に利用
する以外には、見学会で気軽
にいろんな人に見てもらっ
ている。通常の博物館展示
と違って手に取って見ても
らえるので好評を博してい
る。
L (図書館資料) .. 労働判例や
労務管理の最新情報につい
ては社会保険労務士、弁護
士、労組役員、中小企業の人

切って新しい図書館「エル・
ライブラリー」を立ち上げ
た。以来11年間、労組・企業・
市民の寄付とボランティアに
よって運営を続けている。
◆働く人に役立つ利活用を
「貴重な資料」と自称してい
るが、それを本当に貴重な
ものとして多くの人々が認め
てくれているのだろうか。実
際に活用してもらえているの
だろうか。自問自答の日々は
続く。目録が採れていない大
量のアーカイブズを前にし
て、利活用の道をもっと探ら
ねば、と資料の「見える化」を
巡って努力も続けているが、
なかなか捗らないのが実情
だ。

図書館界では特に「ビジネ
ス支援」課題解決型図書館
という用語が昨今のトピック
ともなっている。従来の、「趣
味や娯楽のための図書館」と
いう固定観念から脱して、働
く人々のための役に立つ資料
提供とレファレンスを目指す
という動きである。当館はも
ともとビジネス支援図書館で
あるが、印象的な事例を1つ
上げよう。
「エルライブラリーでのご
親切的な資料探しやコピーのご
協力いただき、弁護士なしで

ネットワーク・市民アーカイブ 講演会
**市民運動についての
法人格 (仮)**
～活動基盤をどう強化していくか～
当会設立から13年、市民アーカイブ多摩
開設から5年が経過し、私たちは法人格取
得についての議論を重ねています。NPO 法
制定から20年、法人格を活用してきた団体
は、どのように法人格を活用してきたので
しょうか。70年代から地域の
市民運動に関わり、NPO 法制
定にも尽力した早瀬さん自身
のご経験と知恵を伺います。




中労委でも堂々と闘うことが
できました」(原文のママ)と
のお礼メールを寄せてくださ
る利用者があった。裁判資料

事担当者たちが活用してい
る。中小企業にとっては、あ
りがたい情報源である。
A (アーカイブズ、記録資料) ..
研究者、学生・院生が活用す
る。時には退職労組員が往
時を懐かしがって資料を探
しに来ることも。

2020年 2月15日(土曜日)
午後1時30分～4時30分
会場：立川市子ども未来センター
(立川駅徒歩12分、西国立駅徒歩8分)
講師：早瀬 昇さん
(大阪ボランティア協会)
資料代 500 円(会員無料) / 定員 70 人

を探していたところ、当館が提供した資料のおかげで公判に証拠として提出することができ、勝訴できたという利用者の声を寄せてもらったこともある。本館に図書館員冥利につきる嬉しい便りだ。

◆労働運動史編纂を通して

当館所蔵資料活用第一の成果は、なんといっても当法人が編纂を続けている『大阪社会労働運動史』全9巻(第10巻編纂中)である。

エル・ライブラリーを設立した当法人(略称「社運協」)は1978年に労働運動史の編纂などを目的に設立された。したがって、歴史書編纂のために収集した豊富な一次資料が当館のコレクションとして蓄積されてきたのである。現在ではこれらの資料を使って、大学や在野の研究者が自らの研究を進めている。これまでいくつもの科研費(日本学術振興会の研究助成

金)プロジェクトに活用されてきた。

また、さまざまな大学の研究助成金を得て、データベースの作成公開も行っている(例:労働組合旗データベース、オーラルヒストリー・データベースなど)。

◆息づかいが聞こえる

当館の多くの一次資料を読み込んでいくと、その時代その時代の働く人々の息吹や希望や怒りや喜びが見えてくる。

たとえば、大正時代の京都帝大の学生が書いた巻紙に墨書のラブレターは、青春の息吹と純愛の赤裸々な告白が、読んでいて微笑ましくもちょっと恥ずかしい。それは後に労働弁護士となり社会大衆党から代議士になった田萬清臣が婚約者に宛てたものだ。妻となった明子と共に夫婦で社会運動に邁進し、貧しい者のために身を粉にした。



1950年代半ばに近江絹糸労働組合の組合員であった紡績女工たちが書いた職場新聞や文芸誌は、当時十代であった若者の赤裸々な気持ち

が描かれていて、若年労働者の心性がよくわかる。

スターリン追悼大会のポスターは、まだ公式にその独裁と肅清を批判されていなかったスターリンが神格化されたデザインが目を引く。

59年の勤評闘争時に校長をつるし上げた日教組組合員である高校教師たちが、10年後には「高校紛争」により生徒からつるし上げられる立場になって苦悩する様子がよくわかる一次資料も残されている。

このように、数え上げればき

第5期 リョクイン 緑蔭トーク報告

第2回 6月22日

国際NGO(市民組織)としての グリーンピースの魅力と可能性

吉野良子さん(グリーンピース・ジャパン)

「地球が壊れる前に未来を守る
一步を踏み出すのか。手遅れ

になった後で後悔するのか。
決めるのは私」。事前にペット

ボトル持込禁止の連絡もありつつ、そんな刺激的な問いかけで終わった当日の話は、今自分に何ができるのかを考えるきっかけとなるものだった。

(報告・鈴木美和子 運営委員)

小1の娘、夫と3人家族。大学院では欧州統合を研究し、博

りがないほどの多くの歴史資料は、その時代に立ち返り、教訓をそこからくみ上げ、今を生きる私たちがなぜ今ここに居るのかを知るよすがとなる。だから、

過去の資料を引き継ぐだけでなく、現在の資料もまた収集し、未来へとつないでいくのが私たちの使命だ。
(たにあい・かよこ 会員)

市民アーカイブ多摩の四季

早春 キバナ セツブンソウ

寒い日がまだ続く早春、枯れ葉の下に小さな黄色の花を見つけたのが毎年の楽しみです。この花、長年みんなでフクジュソウと信じ込んでいましたが…。

写真の花はいかにも野生のフクジュソウの生え方とよく似ています。花弁のように見える黄色の萼片が多数あり、早春に葉よりも早く満開になる点も似ています。しかし葉が細かく切れ込まないこと、たくさんある雄蕊(おしべ)の下に蜜腺のように退化した花弁が5個あることなどで、同じキンポウゲ科のセツブンソウの伸



間であることがわかります。セツブンソウ属はユーラシアに数種が知られており、東アジアのものは花が白く、西アジア(ヨーロッパ)のものは黄花です。そういえばミズバショウの花も、アジアのものは白く、北米のものは黄色です。ね。
(邑田仁・むらたじん 元東大小石川植物園園長)

された時間で何をすべきかを自問。より安心して暮らせる社会の枠組みを作ることには貢献したいと思ひ、15年にGPPJ(グリーンピース・ジャパン)へ転職した。

〈深刻な危機は気候変動〉

喫緊の課題は気候変動だ。パリ協定は平均気温上昇を2℃以

アーカイブならびに議論は少ないという砂川闘争資料が抱える矛盾は、先述した歴史過程に起因する。

本来アーカイブの空間として機能できる地元・砂川においては、当時からのしこりや対立から、闘争については触れないという状況が長年続いたため、「ひるば」が孤軍奮闘しているのを除いて、風化が進み、住民の関心も高くないのが現状である。

現在、「ひるば」は地元におけるほとんど唯一の闘争を記念する「歴史の場」となっている。それは20年近く続けられた闘争の、とりわけいくつもの裁判闘争においては、宮岡政雄が「砂川の法務大臣」となり、粘り強い闘いを展開していったことによる。

■「ひるば」の可能性

以上のような地元における歴史の「空洞化」に抗うべく、「ひ

るば」では、宮岡文書のアーカイブ化を進めると同時に、地元住民との関係の再構築に努めている。その代表例が、子ども食堂「ふらっと」の開設である。また、「ひるば」の前に従前として拡がる自衛隊基地に対しても、2019年6月、立川駐屯地所属のヘリコプターが「落着」事故を起こした際には、地元市民団体と共同で申入書を提出するなど、現在進行形の「砂川問題」に

も注力している。

「ひるば」の周りには、拡張予定地として買収され、国有地になったまま利用されることなくフェンスで囲まれた土地が「虫食い状態」で散在している。また、立川の駅周辺は、そこがかつて「基地の町」だったことなど想像もつかない変貌ぶりである。さらに「留保地」として返還後手付かずになっていた西側の昭島地区も、再開発の目処が立ち、

ジャングル化していた森が伐採され、米軍基地の遺構が破壊前夜の「期間限定」の風景として姿を現していた。それらの風景は砂川闘争の歴史がいまいかなる状況に置かれているかを無言で示す。「ひるば」を訪れる際は、ぜひ資料のみならず、周囲の風景を合わせ見ること、闘争が歩んだ歴史過程についても想いを馳せていただければと願う。

(記・高原川会員)

私と活動13 市民資料

図書館と両輪を担いながら

山口真理子 (元調布市立図書館司書)

市民アーカイブ多摩で月1回資料整理のボランティアをして4年になります。

□つながりの中で

東京の市区町村立図書館にとつて、図書館の図書館である都立図書館はとても大きな存在でした。特に多摩地域の図書館と都立多摩図書館との関係は大変密でした。

当時の都立多摩図書館と同じ建物に多摩社会教育会館・市民活動サービスコーナーがあり、大学の小林文人研究室(社会教育)の後輩である内田純一さんや江頭晃子さんが勤めていました。

石原都政になって社会教育行政が大きく後退し、図書館にも大きな影響がありました。そして、市民活動サービスコーナーも廃止されました。その後の活動を引き継ぐための市民組織のアンティ多摩や市民アーカイブ多摩設立時のカンパや会員としての支援資料の引越してきました。

そして、43年間の図書館務め終了後に、資料整理のボランティアを始めました。



□図書館との違い

市民アーカイブ多摩の資料は、図書館で扱っている資料とはかなり趣が異なります。小冊子や新聞形態(主にタブロイド判)が中心で、チラシ類も重要な資料。図書や雑誌につきものの表紙や背表紙、奥付がないものがほとんどです。そのままでは配架できないのでファイルに綴じたりボックスに入れたり、という作業をしています。図書館で地域資料の整理をしていたことが少しは役に立っている、と思っています。

配架作業の他には、ミニコミ誌本体とチラシ類が混ざってファイルされているものを、分けること。チラシ類の方が多いミニコミも少なくなく、

本体が読みにくいのです。他には、ボックス内の縦書き(通常縦じた側が右側になる)ミニコミ誌の並びの乱れを直すこと。その状態が持続できるように、ボックスに「新しい号はこちら」というラベルを貼りました。新しいミニコミは次々に入ってきますので、配架しながら、間違った並びや飽和状態の気になるファイルの訂正や追加等を行っています。

□独自の視点を持つ資料群

数年前に調べたのですが、市民アーカイブ多摩で所蔵する調布市内で発行しているミニコミ19誌のうち18誌は調布市立図書館で所蔵していました(ちよつとホッ)。地域資料の1つとして「住民資料」を収集・保存しており、そこにミニ

コミ誌等も含んでいます。本誌16号には幹線道路開通に伴う自治会の運動資料を、地元八王子市市史編さん室が引き取ったとありました。

市民アーカイブ多摩はミニコミ誌の専門資料館として知る人ぞ知る存在で、多摩地域だけでなく、都内や全国から資料が送られてきます。地域に根差した、多くは体制に流されていない独自の視点を持って活動している個人や団体の資料を、一堂に見られるという大きな役割を持っていきます。この市民アーカイブ多摩と地域の図書館等が両輪となつて、設立理念である「1人ひとりの人権を尊重する社会、よりよく生きやすい生活をつくっていく」ことが実現しますように。

(やまぐち・まりこ川会員)

三二 コミ紹介

市民アーカイブ多摩が所蔵する、団体や個人が発行する会報・通信(ミニコミ)を、発行者の方に紹介していただきます。

仲間

機関紙『仲間』は、「仲間と共に歩む会」の機関紙として、毎月1回発行して、全国各地に送っています。(最初の10号までの紙名は『あゆみ』、11号から『仲間』と改称)。52号までは初代の編集の森田久夫さんの手書きでした。森田さんの逝去により、編集担当が阿部キヨコさんになりました。タイプ印刷となりました。やがてワープロ印刷となり、2019年10月現在、429号となります。

私たち「仲間と共に歩む会」は、まだ苦しんでいるアルコール等依存症の仲間やメッセージをと、1982年から「アルコール問題の市民活動」に取り組ん

できました。本人や家族の自立を支援するために、身体的・精神的・社会的サービスをを行っています。仲間の社会復帰を目的とした、共同作業所を東村山市(90年)・東久留米市(92年)に開設しました。「アルコール・薬物相談」も各作業所で行っています。回復を目指す仲間の体験談と、専門家の講師の方々に講演をしていただく「アルコール問題を考える集い」も隔月で開催しています。

アルコール依存症は「病気」です。お説教や、体罰・刑罰は無意味で、本人も家族も回復するには、回復のプログラムが必要です。誰もが仲間として、リスベクトしあい、1人ひとりが主人公な社会を目指しています。

『仲間』の編集のモットーは、「何が何でも読んでいただく」と。分かりやすく、仲間にはわかるように、心がけております。ささやかな運動ですが、三多



- ・1982年創刊、850部、B5版、24頁、年12回
- ・賛同年会費：3,000円
- ・tel：090-9853-8959 / E-mail：nakamaayumu@yahoo.co.jp
- ・当館所蔵：396号～
- ▽427号内容＝講演「アディクションと家族の暴力」(講師：高橋郁絵)報告、「仲間のひろば」…短歌、エッセイ、体験談、家族の回復、「集い」相談会の案内他。

経産省前テントひろばニュース

福島原発事故から半年後の2011年9月11日、ポケッタパークと呼ばれていた経産省本館脇の国有地にテントを建てて「経産省前テントひろば」(以下「ひろば」と名乗って始まりました。原発再稼働に反対し、福島事故を繰り返さないために、目に見える形で、政治家・官僚たちと連日連夜の闘いを呼びかけました。呼びかけたのはその4年前に結成された「九条改憲阻止の会」。かつて60年安保改定阻止の闘いを担った人々が中心でした。その呼びかけにこたえた福島島の女性たちはすぐに上京し、霞が関一帯で原発事故責任を追及する行動を起こします。その後、民主党政権が崩壊す

摩の「アルコール問題」を1歩でも前進させることを願っています。(宮川日出雄)

▼第280回

- アルコール問題を考える集い
- 「人はなぜ依存症になるのか」
- 日時：11月24日(日)
- 13時30分～16時15分
- 会場：東村山市中央公民館
- 講師：松本俊彦先生(国立精神・神経医療研究センター)



- ・2013年創刊、1000～1500部、A4版、2頁、隔週発行
- ・tel：070-6473-1947
- ・当館所蔵：1号～(欠号あり)
- ▽173号内容＝脱原発ひろば9年目行動へ、9.16さようなら原発全国集会、9/19東電刑事裁判・判決迫る、新聞・雑誌より、座り込みメンバー募集他。

ると、13年3月には国が「ひろば」の土地明け渡し裁判を提訴。経産省と土地使用の交渉に当たっていたメンバーの淵上太郎さん、正清太一さんが裁判の被告とされてしまいました。

『テントひろばニュース』は、この法廷闘争の経緯と内容を明らかにして「ひろば」運動の意義を訴えるため、最初の編集を淵上さんが、途中から正清さんに代わって発行されてきました。残念ながら今年になって2人は相次いで逝去し、いまはテントひろば運営委員会がひろばの活動報告を中心に隔週で発行しています。

16年夏、最高裁がテント撤去を認める決定を出し、テントは強制撤去されましたが、直後から1人ひとりが「テント此処に在り」との思いを持って経産省本館前で、土日祭日も休むことなく昼12時から午後6時(冬場は5時)まで、交代で座り込み抗

議行動を続けています。

連日の座り込みはメール配信される毎日の「テント日誌」によって共有されていますが、紙媒体の『ニュース』は「ひろば」による抗議活動や他団体の運動情報、原発再稼働に走る国や電力会社などの情報を掲載して他団体との連携を築くようにしています。テントには当初より脱原発に賛同する不特定多数のメンバーが参加し、『ニュース』も「ひろば」運動を持続させる手段として重要な役割を担っています。

テント撤去から1105日が経過した19年9月10日の『ニュース』174号は、9年目の9・11抗議行動と小出裕章さんの講演会のお知らせ等を掲載しました。原子力発電の事故の恐ろしさを知った人々により、脱原発の日本を実現するまで、ひろばの運動が継続することを目指しています。(大賀英二)

市民アーカイブ多摩の資料棚から ⑪ 〈十五年戦争〉

「資料棚から⑦⑧」（本誌11・12号）の2回にわたり、長島祐基さんが分類番号20「平和」に分類された資料について、詳細に紹介された。今回は、同じ20番台の中の29番「十五年戦争」に分類されている資料の中から、ある程度まとまった号数を所蔵しているミニコミを紹介する。

【アジアへの戦争責任】

分類29の資料は、主に「十五年戦争」を通じた日本の近隣アジア諸国・地域に対する戦争責任に関わるテーマを内容としたものが多い。例えば戦争責任全般に関して『アジア・太平洋地域の戦争犠牲者に思いを馳せ、心に刻む集会』（同会）の開催資料の第6（1991）～第23回（2009）と共に、『同集会報告』の第7（1992.9）～22回（2008.11）を所蔵。また同会が91年8月に開催した「戦後補償国際フォーラム」を機に、発刊した『戦後補償ニュース』を1（1992.5）～30号（1998.7）まで所蔵。他に国会図書館に「恒久平和調査局」設立を目指すなどの活動を行ってきた戦争被害調査会法を実現する市民会議発行の『市民会議通信』の11（2000.3）～34号（2006.7）と『市民会議ニュース』の95（2002.1）～175・176号（終刊

号2018.11）を所蔵。

【中国への戦争責任】

『NPO中帰連平和記念館会報』（同記念館友の会）を1号（2008.5）から継続して所蔵。川越市の同館は戦後、中国の戦犯管理所から帰国した日本人元戦犯の資料を保管している。平頂山事件と撫順戦犯管理所の継承運動（パネル展、展示会、現地での式典等）の資料として『撫順から未来を語るニュース』（同実行委員会）を1号（2014.9）から、『ノーモア南京の会ニュース』は、43号（2017.11）から各々継続して所蔵。731部隊による犠牲者遺族との交流、元隊員への聞き取り、展示会等の活動をしている「731部隊被害者遺族を支える会」発行の『731通信』は2号（2011.4）から継続して所蔵。また、『Suppei 中国人戦争被害者の要求を支える会ニュース』を48（2005.5）～78号（2012.11）まで、同紙を継続した『suppei ネットワークニュース』（中国人戦争被害者の要求を実現するネットワーク）を1号（2014.1）から継続して所蔵。

【毒ガス遺棄・化学兵器被害】

特に、中国への日本軍遺棄毒ガス兵器等の被害問題について『チハル8・4事件ニュース』（チハル8・4被害者を支援する会）を27（2012.7）～41号（2015.2）、敦化での毒ガス被害者支援を目

的に04年に活動開始した『周くん・劉くんを応援する会ニュースレター』を23（2012.4）～32号（2016.4）まで所蔵。前記のチハルと敦化の裁判支援活動終了後に2つの団体が母体となり結成された『遺棄毒ガス中国人被害者を支援する会ニュース』を1号（2016.4）から継続して所蔵。また『化学兵器CAREみらい基金 News Letter』を1（2006.2）～22号（2017.冬）

和基金ニュースレター』を、1号（2017.5）から所蔵している。

【韓国軍人軍属・性暴力・被爆・戦争体験】

『未来への架け橋』（在韓軍人軍属裁判の要求実現を支援する会）を1号（2001.2）から、靖国神社への韓国軍人軍属の戦没者合祀取消を求める訴訟運動を展開している『ノー！ハプサNO！合祀』は22号（2011.9）から各々継続して所蔵。戦時性暴力の問題では、『出口^{チウツツ}』（※中国語で「思いの丈を述べる」の意）は、「山西省における日本軍性暴力の実態を明らかにし、大娘たちと共に歩む会」の発刊で60（2012.5）～73号（2016.6）を所蔵。一方、フィリピン、韓国の元慰安婦との交流、支援、上映会等の活動を伝える『ロラネット・ニュース』（フィリピン元慰安婦支援ネットワーク・三多摩（ロラネット））は、1号（2011.4）から継続して所蔵。

（2015.6）を所蔵。『対馬丸通信』（対馬丸記念会）は所蔵号数が少ないが所蔵している。

【戦争遺跡の保存】

最後に戦争遺跡保存の活動では、長野市の『戦争遺跡保存全国ネットワークニュース』を15（2007.8）～19号（2009.1）、『B29墜落慰霊碑』の建立請願運動など「調布市内の太平洋戦争にかかわる記録を保存し、次世代に継承する」事を目的に活動している「調布市戦時記録保存会」が発刊の『雲雀』は、15号（2010.8）から継続して所蔵。さらに松代大本営工事に伴い、「一時期慰安所」として使用された建物を移築、復元して「もうひとつの歴史」を語る資料館とすることを目標に展示施設の開設を目指した『もうひとつの歴史館・松代』建設実行委員会ニュース（旧 松代・朝鮮人「慰安婦」の家を残そう実行委員会）を1（1996.5）～65号（2012.11）まで所蔵しているが、13年4月に増改築工事が終了、恒久施設としてリニューアルオープンしたのを機に、『もうひとつの歴史館・松代』運営委員会ニュース（）に継承され、1号（2013.9）から所蔵。

以上、紹介してきた資料が提起している日本の戦争がもたらしたさまざまな被害、被害の諸相は、未だ日本の戦後責任が終わっていない現状を伝えている。

（堀内寛雄 会員）

資料整理ボランティア



まで所蔵。同基金は、被害者を医療面でサポートする目的で「中国人毒ガス被害者基金」と「チハル人道支援基金」が統合し05年12月に創設。「化学兵器への関心（CARE）」と「被害者の体と心をケア（CARE）」を活動目的としたが、16年12月に解散し、現在はそれを継承した『NPO法人化学兵器被害者支援日中未来平

寿町関係資料室

— 横浜・ドヤ街の歴史と今を伝える —



横浜市中区には、東京の山谷、大阪の釜ヶ崎とともに日本の3大ドヤ街の1つといわれている「寿町」(行政用語では「寿地区」)がある。寿町・松影町・扇町・長者町・三吉町の中に120軒ほどの簡易宿泊所が建ち並ぶ。松影町の一角に民間の「ことぶき共同診療所」があり、その2階の1室に「寿町関係資料室」がある。

ことぶき共同診療所は、50年以上寿町に関わってこられた田中俊夫さん(16年逝去)が仲間とともに1996年に開設した診療所である。現在は鈴木伸さんが引き継いでいる。今回案内をしてくださった資料室担当の松本一郎さんは、社会福祉学の研究者で、93年から寿町に関わり、診療所や資料室の活動に関わられている。

□日雇い労働者の街から、医療・看護・介護を必要とする街へ

この簡易宿泊所を根城にして、かつては横浜の港湾労働、その後は土木建設業に携わる多数の日雇い労働者が住んでい

た。人口が膨らんだ60年代には8千人が宿泊していたといわれている。当時は20代・30代を中心に家族連れが多く、千人以上の子どもたちが暮らしていたという。

しかし、今は日雇い労働の仕事も少なくなり、住民の多くは高齢化した単身の男性で生活保護を受けている人も多く、医療・看護・介護を必要とする街になつていっていることである。

56年10月に最初の簡易宿泊所ができてから60年あまり。その歴史は長く、その間にさまざまな活動、運動も行われた。そのなかには、市の(あるいは市の職員としての)活動があり、市と住民の共同の活動があり、住民・支援者の独自の運動があり、多彩である。それらは、資料室の所蔵資料にも現れている。

□多種多様な活動の資料

60年代以降、住民の生活や活動・運動の1つの拠点となつ

た「寿生活館」関係の資料。子ども会ぼつこの「子ども会のあゆみ」や「横浜市ことぶき学級の記録」。

70年代から今日まで続いている越冬闘争関係の資料、80年代の中学生による山下公園野宿生活者殺傷事件を契機に始められた「木曜パトロール」関係の資料。この「ことぶき共同診療所」発行の『ことぶき共同診療所だより』や同資料室発行の『寿町ドヤ街』(8号まで発行)、『ことぶき簡易宿泊所街地図集』等も、もちろんある。さらに、2000年代に入ってから野宿生活者を始め住民をさまざまな形でサポートして

きたNPO「さなぎ達」関係の資料があり、ある時期に寿生活館や児童相談所で活動した野本三吉さんの著書、山谷や釜ヶ崎に関する本など、かなりの数が書架に並んでいる。

利用者は、地域住民のほか、学生・研究者、自治体関係者、ジャーナリスト等で、貴重なものを除いて貸し出しもしているとのこと。検索手段は、データベースがある程度できているが、ネット上で公開するまでには至っていない。担当の松本さんは、原則として週1回(金曜日)しか出勤しないので、あまり広く広報はしていないとのこと。他の日も1階の診療所で申し出てくれれば対応してくれるとのことだが、できれば松本さんのメールアドレスに、事前に連絡してもらえるとよいとのこと。

資料室を見学したあと、松本さんが寿町を案内してくださった。○○館、○○荘といった簡易宿泊所が道路の両側に建ち並んでいる。公園や道路

□今も簡易宿泊所が建ち並ぶ

資料室を見学したあと、松本さんが寿町を案内してくださった。○○館、○○荘といった簡易宿泊所が道路の両側に建ち並んでいる。公園や道路



寿生活館と寿公園



資料室内の書架

には、やはり高齢の男性の姿が目立つ。宿泊所の部屋は3畳1間が多く、家賃は1泊2千円前後、敷金・礼金はなし。今は福祉事務所の紹介で他地区から来る人が多いそうだ。寿生活館と、その前にある寿公園(ここで越冬闘争が行われている)、公立の診療所や銭湯のある生活館とともに、もう1つの住民の集う場である「寿町健康福祉交流センター」(旧寿町総合労働福祉会館)、多くの人々に利用され2年前に閉じられた「さなぎの食堂」の跡など、興味深く見学することができた。(平川千宏=会員)

寿町関係資料室

- ・所在地：横浜市中区松影町 2-7-17
リバーハイツ石川町 ことぶき共同診療所内
- ・連絡先 E-mail: BZX00431@NIFTY.NE.JP (松本)

◆毎日・読売新聞に掲載

久しぶりにマスコミ（地方版）の取材があり、記事を読んだ方から新たに資料寄贈や入会もありました。毎日新聞5月14日「市民の活動記録4・6万点超」立川 ミニコミ図書館5年、読売新聞9月12日「市民活動の資料 後世に」開館5年 会報など1800タイトル」です。

◆ご寄付をいただきました

ご自身発行の通信もご寄贈くださっている会員と家族の方から、多額の寄付をいただきました。次の5年を見すえて新たなプロジェクトも立ち上がったところで、背中を押していただきました。ありがとうございます。

◆資料の入力が追いつかず

本誌8号の本欄に「入力するミ



運営委員会など

ニコミがなくなつた!」と嬉しい悲鳴を書きましたが、今年4月から若き入力ボランティアさんが来られなくなり、あれよあれよという間に入力が必要なミニコミが溜り続けています。資料整理ボランティアさん、募集中!

◆部会・プロジェクト活動

今年度の運営委員会は、例年通り、毎月第3金曜日の19時〜会議を開催しています。月1回では検討事項が深まらないため、資料部会・企画部会・広報部会を数人ずつ担当し、それぞれ検討した案を運営委員会で決定します。今年度は新たに「出版」「組織基盤強化」プロジェクトが発足しました。出版Pは、これまでの当会の記録を冊子化。組織基盤Pは、今後の組織安定のための方策案を検討します。部会とプロジェクトは正会員の皆さまの参加も歓迎しています。詳細は事務局までお問い合わせください。

会員数(2019年9月)

- ・146人(正会員60、賛助会員86)
- ◆新規入会ありがとつ
- ・正会員 〓 瀬畑 源さん
- ・賛助会員 〓 長谷川正さん

カンパありがとう

(2019年6〜9月)

- 澤西義博さん、富窪高志さん、林 喜代三さん、林 治代さん、麓 常夫さん、匿名1人

参加者・会員の声

- ・あらためて砂川闘争のお話を聞き、これからの街づくりの方向を考えさせられました。
- ・貴重な情報を得ることができた。スタッフの努力で整理され、また企画がされ、すばらしいです。
- ・市民レベルの関心の高さを知り、感動しました。(地元)琉球島島民に波及できる方法はないものかと考えます。
- ・資料をゆつくり拝見しにきます。

訃報 田中幹子さん

19年7月25日、病気のため逝去されました。享年82歳。元東京都立多摩社会教育会館市民活動サービスクォーター職員で、70年代から市民活動資料の収集保存に関わられてきました。当会設立を牽引され、運営委員も務められました。ご冥福をお祈りいたします。

編集後記

今年の夏から秋は、酷暑と台風が記憶に残ります。開館日に超大型台風襲来で臨時休館。過去には、積雪での臨時休館も。たった2回の事例なのに、私は共に当番。何という巡り合わせでしょう!! (増・江・佐・鈴)

市民アーカイブ多摩利用案内

- ・開館日：毎週水曜日、第2・4土曜日(8月中旬・年末年始の休館あり)
- ・開館時間：午後1時〜4時 ・入館カンパ：100円〜
- ・所在地：東京都立川市幸町5-9 6-7 (多摩モノレール、西武拝島線「玉川上水駅」南口徒歩8分)
- ・tel & fax：042-536-5535 (電話は開館中のみ)
- ・見られる資料：2002年以降に市民活動団体や個人が発行するミニコミ(通信や会報など)1,800タイトルほか
- ・ホームページにミニコミのタイトル、発行団体を掲載しています。 www.c-archive.jp

